



ないしょ話

志賀 貢



毎日新聞社

定価 八八〇円

医者のないしょ話

昭和五十四年七月二十五日第一刷
昭和五十四年十一月五日第八刷

著者 志賀 貢

編集人 高杉治男

発行人 牧内節男

発行所 毎日新聞社

●100 東京都千代田区一ツ橋／●530 大
阪市北区堂島／●802 北九州市小倉北区紺
屋町／●540 名古屋市中村区名駅

印刷 図書印刷

製本 正文社

©志賀 貢 1979

医者のないしょ話

目次

壁の花
セ

看板違い
三

親切すぎた患者達
咒

地獄・極楽
宅

犯人をさがせ
凶

知恵くらべ 一四〇

名医の条件 一四一

七枚の診断書 一四二

最後のお願ひ 一四三

虫より薬の効いた男 一四四

装幀・イラスト 七崎 ゆき

医者のないしょ話

壁の花

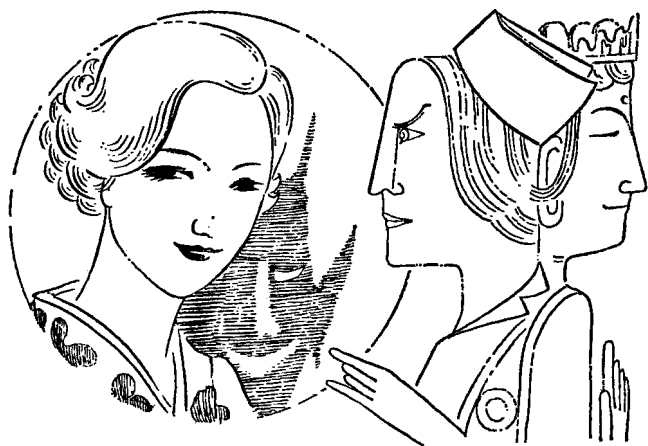
1

婦長の長居過子はこわい女だ。

「おめでとう、おめでとう、いやあ、まったくおめでとう」彼女の誕生日を、私は心から祝ってやったつもりだったが、

「先生のはどうせ皮肉でしょ。三十五にもなったらちっともめでたくなかないんだから、キイ」彼女は口を一文字にして私をにらみつけた。全く気性の激しい女である。

私と彼女との出会いは非常に古い。なにしろ妻と結婚するずっと以前からの仲なのだ。私がまだ大学病院の医局にいたころからだから、ざっと数えても十五年は彼女とつきあってきた計算になる。



そもそのなれそめは、ネズミがとりもつ縁だった。「先生痛いでしょう。でも、本物のネズミでよかったわね」その頃の彼女は、かわいい女だった。北国の出らしく色が白く、いたずらっぽい目つきをするたびにまぶたがくっきりとした二重をつくった。

当時、私は学位論文の研究でドンリュウというたいへんどうもうなネズミととりくんでいた。このネズミにはなんと手をかまれたかわからない。そのたびに、外科外来にいた長居過子の世話になった。どういうわけか、彼女はことのほか私には親切だった。だから、私は時々ネズミに意識的にかまれてやったりした。

「先生、開業なさるんですってね。私、つかっていたくわ」彼女はかなり強引だった。

大学病院の安月給ではとても両親や妻をやしなえないので、私はあっさりと大学病院をやめることにしたのだった。その時、彼女もさっさと大学をやめてしまい、私が開業した時はもう婦長になっていた。「あなた、長居さんとおかしいんじゃない」結婚当初、妻はよく二人の仲をうたがったものだ。だが自分でも不思議なくらい長居過子とはなにもないのである。本当なのだ。十五年もつきあっているながら手ひとつにぎったことがない。また彼女の方も私には全然異性を感じたことがないらしい。いわば二人の仲はうまが合うというやつなのだろう。

「あんまり私のこといびると、こんどあの女いじめちゃうから」

「だれのこと、その、あの女っていうのは？」

「とぼけたってダメですよ、もう有名なんですから、キヌカワハ・ダ・コノ キイー」

婦長の口はいよいよひんまがってきた。危ない、危ない。私は婦長の誕生パーティーから早々に退散することにした。婦長のやつ、今夜はよくよく虫のいどころがわるいらしい。そんなに三十五になったことが悔しいのか。それにまあ近頃はどうか、小姑の手口まるだしではないか。私にもそれでやってくる。そう思うと私はゾーッとした。

ついこの前もそうだった。私が「食道ポリープ」の患者を「食道癌の疑い」といって大学病院へおくったら、「癌細胞はない」という返事が来た。私の誤診だった。

「先生の腕も落ちたわね、大学にいた頃は秀才だって聞いてたけど、ホホホホホ。子供といっしょに勉強もしないで、テレビの若い娘ばかりみてるからダメになるのよね。ホホホホ」その時、彼女はキャキャ言ってるんだ。

そうかと思えば、ある時患者の連れだったか待合室で、「この先生ね、胃腸科の大家だっていうけど心配でね、でかい病院でためしにしらべさせてみたんだ。そしたら、やっぱりここの先生の診断あたってたよ」と隣の人に話していたことがあった。すると長居がとびだして行って、

「あんたあゝ、うちの先生なんだと思ってんのよ！ ためしとはなによ、あんたみたいな人病院にかかる資格ないわよ！ もうこなくていいからさっさと出て行って！ キイ、キイ」とどなりつけた。長居のけんまくがあまりすごいので、その患者は薬も受取らずに逃げだした。おそらく、この患者には長居が赤オニに、そしてそんな看護婦をつかっている私がひどい医者にみえたに違いないのだ。だが、私は長居の真っ赤なオニの顔のなかに、あのネズミにかみつかれた時親切にしてくれた彼女の同じ顔を見た。

2

患者の絹川肌子きぬかわはだこさんは婦長の目のかたきにされている。

(たいした病氣でもないくせに、いつもこぎれいに着飾って、わざわざ自分の美貌をみせびらかすために来るんだわ、あの人。メスネコみたいに先生に色目なんかつかつてさ、まったくいやな女だわよ)

婦長はきつとそう思っているに違いないのだ。

「絹川さんってきれいな、モデルさんみたいね」などと、入りたての若い看護婦が言おうものなら大変である。まゆげをつりあげた婦長のカミナリが落ちてくる。まったく、絹川肌子さんが来たときは、婦長はしまつがわるい。

彼女の病氣を、婦長は仮病だ(けびょう)と知っているらしいのだが、医者の中からみれば患者に違いないのだ。彼女は低血圧だ、と言うと、そんなの私だってそうです。でもこの通りピンピン働いてる。自律神経失調症だ、と言うと、あら、あの若さでもう更年期障害ね、氣の毒ね、と婦長はいちいち目くじらを立てて私にかみつくだ。でも、肌子さんはあきらかに病をもっている。美人でスマートでセンスがよくて、和服のきこなしが天下一品で、いかにも幸せそうにみえるのだが、そりゃ彼女にだって一つや二つ調子のわるいところがあるだろう。婦長は知らないが、肌子さんは軽い神経症をわずらっていた。「眠れない。頭が痛い。動悸がする。食欲がない。肩がこる」と彼女の症状は多彩だった。その原因が何なのか、それが知りたくて、肌子さんが来るとはかの人の何倍も時間をかけて問診をやる。

ところがそれが婦長の癩しかの種らしい。

私と肌子さんとは実によくしゃべる。患者のあとがつかえカルテがずらつたらんている時でも、じっくりと時間をかけて、子供のこと、学校のこと、ダンナさんの仕事のこと、はては経済から政治のことなどまで話し合う。だが、それでも私は肌子さんの病気の本当の原因がつかめないのだった。また、そんな時の私の表情がどうも誤解をまねくらしいのだ。婦長に言わせると、デレデレと鼻の下が長くなるそうであるが、そんなことは断じてない。そんなにやけた顔がこの私につくれるはずはないのだ。

それにしても彼女はきれいだ。第一、肌がぬけるようにきれいだ。私などもう何千人もの女の肌をのぞいてきたが、肌子さんのような女性にはこの年になるまでおめにかかったことがない。ハツとするような美人でも、医者の目にかかることはいは肌の点で大減点されるものであるが、彼女の場合は例外だ。その肌のきめこまかなことはたとえようがない。色が白くてなめらかで、その上つやがある。拡大鏡のレンズを通してみても、皮膚の毛穴が全く見えないのだ。

私のワイフも新潟美人で色白で相当のモチ肌である。四十に近いというのに、いっこうに色香はおとろえぬ。他人がどう評価しようが亭主の私がそう思っているからまちがいはない。だが、このワイフをもつてしても、彼女の前では色あせてしまうに違いない。婦長

だってそうだ。十五年前の彼女の美貌ならあるいは、なんとかたちうち出来たかもしれないが、今となっては、二人をならべると婦長には悪いが、整形美容の術前術後のサンプルみたいなものなのだ。

3

初夏のある日――

「先生、実は私のことではなくて別のことで御相談が……」と、訪ねてきた肌子さんの表情には、いつものはなやいだ明るさはなかった。

私は、婦長やほかの看護婦の視線を意識しながら「どんなことですか」とわざと大きな声できいてみた。

「実は、いままでお話したことがございませんでしたが、家におじいちゃんがいるんです」と彼女はきりだした。

「ああそうでしたか、おじいちゃんがね……」私はおじいちゃんのところをこめて声をさらに大きくした。婦長が私の目をジッと追っているのだ。

「そのおじいちゃんが、ねたきりでして……」

「いつからそんなぐあいなんです？」

「もう半年にもなりますわ」彼女の肩ががっくり落ちるのを私は見逃さなかった。そして彼女の表情には苦悩の色がありありと見えた。ああ、そうだったのか、それが彼女の病気の原因だったのか、私はようやく患者の心を聴診出来た。

「で、どんな容体なんですか？」

「いままでおじいちゃんのかかりつけの先生がいまして、もう三十年来だそうなんです、先生の話では、脳軟化症で入院させなければダメだとおっしゃってます」

「なるほど」

「もう、家ではかたときも目が離せないんですよ、先生、あの病気はそんな状態になるものなんでしょうか」

「いやあ、そうでしょう、よくわかります」

私がうなずくのを見て、彼女は安心したようにしゃべりだした。

「それはもうひどいものです。きかない話ですけど、一番こまるのがおしもです。目を離すと部屋のどこかしこに用をたしてしまいますの。あまりひどいので、先月からオシメを使わせていますけど、それも目を離すと自分ではずしちゃうし……、先生ごめんなさい、患者さんお待ちじゃ……」

「いやいやかまいませんよ」